第１章
戦争を知る

昭和20（1945）年の終戦からすでに70年あまりが過ぎた

私たちは、太平洋戦争のことをどれだけ知っているだろうか、どれだけ学んだのだろうか

戦争は、どうしておこってしまったのか

戦争は、人々にどのような影響をあたえたのだろうか

すべてを知ることは困難でも、その概要を知り未来に備えることはとても重要だ

報國貯金箱
太平洋戦争中期以降には、戦費の捻出にも事欠き、
国民には日々の生活を切り詰めてでも貯金するように呼びかけられ、
戦費が調達された
（杉並区立郷土博物館蔵）

太平洋戦争と杉並

昭和６(1931)年に満州事変が起こると、「非常時」という言葉がさかんに使われるようになりました。さらに昭和12（1937）年、中国との全面的な戦争が始まると、政府は昭和13（1938）年に国家総動員法を成立させ、国民生活を統制するようになりました。

それに伴い、全国で戦時体制に向けた住民の組織化が進められました。杉並区でも昭和 13（1938）年には国家総動員法成立をうけ、65 の町会と 5,056 の隣組が組織され、その他在郷軍人会・青年会・愛国婦人会・国防婦人会なども組織されました。これらの組織には、東京市や杉並区の行政協力機関として、食糧や生活必需品の配給、出征兵士の歓送迎、防空演習や貯蓄の奨励、金属の供出、回覧板による政策の伝達を行い、地域の人々の暮らしに深く関わっていきました。

戦争の長期化による生活物資の欠乏は深刻なものでした。東京市では、昭和15（1940）年に砂糖、マッチが切符による配給となったのをはじめとして、米、味噌、醤油、塩、衣料など生活必需品35種類が切符などによる配給制となり、町会・隣組を通して実行されました。配給される穀物は「最初白米だったのが玄米、大麦、コーリャン、粟、大豆、となり、最後は脱脂大豆」へと変わっていったといわれます。

昭和16（1941）年12月８日、太平洋戦争が始まると「欲しがりません勝つまでは」「贅沢は敵だ」の標語が見られるようになりました。戦争に必要な物資として金属類の個人保有は制限され、寺院の仏具や梵鐘（ぼんしょう）は強制的に供出するよう命ぜられました。杉並区でも「決戦だ残らず出さう銅と鉄」「銅銭を我が身に変えてご奉公」の標語のもと、一般家庭からの銅・鉄の回収が行われました。

男子は国民服にゲートル、鉄カブト、女子はモンペ姿に防空頭巾といういでたちで防空訓練にかりだされるなど、生活は戦争一色になりました。

昭和19（1944）年になると、アメリカ軍のB29爆撃機による空襲が激しくなりました。

杉並では、久我山、下井草、松ノ木、西荻北に高射砲陣地が造られました。また中央線、青梅街道、今の環七や中杉通り、桃園川に沿った土地や高円寺・荻窪・阿佐谷・西荻窪の民家は、火災が広がらないよう強制的に壊されました（建物強制疎開）。

杉並への空襲は、昭和19（1944）年11月24日に始まり、計18回を数えました。なかでも昭和20（1945）年５月25日は55名の犠牲者、516名の負傷者を出す最大のものでした。

高井戸第四国民学校をはじめ、26校のうち12校の国民学校が空襲による被害を受けました。

昭和12（1937）年、日中戦争が拡大すると、政府は国民精神総動員運動を開始し、戦時教育体制の確立を目指しました。

昭和16（1941）年の「国民学校令」により、これまでの尋常小学校６年、高等小学校２年が、国民学校初等科と高等科になりました。教育目的は戦争をすすめる国家に従う「皇国民」をつくろうとするものでした。

太平洋戦争が始まると、児童・生徒は防空頭巾を肩にかけ登下校し、毎月8日には「日の丸弁当」とする慣わしがありました。食糧不足も深刻化し、校庭に畑が作られました。人通りの少ない道にも農園を作り、各学校に割り当てて４年生以上の児童に耕作させました。

また中学校や高等女学校、国民学校高等科の生徒（今の中学生）は、「勤労動員」され、中島飛行機飛行機工場などで働きました。

学校も標的になりやすいことから、バケツリレーによる消火訓練などをし、１階の床下にはすべて防空壕が掘られました。

昭和19（1944）年には、国民学校初等科の３年生以上の学童が、空襲の被害を避けるため、「集団疎開」が実施されました。杉並の学童は家族と遠く離れ、長野県や宮城県の公会堂、旅館や寺などで集団生活をしました。疎開先で待っていたのは、慣れない農作業や食糧確保のための労働でした。長野県に集団疎開した杉並第五小学校の場合、毎日、午前中には勉強をし、午後は近くの畑で農作業をするのが日課でした。高学年の生徒は、桑畑をサツマイモ畑に変えるために桑の根を掘り起こす作業を行いました。「初めのうちは周囲の珍しさに目を見はって喜んでいた子どもたちも、２、３か月すると、だんだん暗い表情に変わっていきました。それは食糧不足と集団生活にありがちな栄養障害、皮膚病、シラミの発生、精神的な不安定など、当時いずれの疎開地でも共通な傾向であった。」（杉五小・鷹野歌子先生『杉並区史』より）次第に笑わない子どもたちが増え、なかには、脱走をくわだてる子どもさえでてきました。

戦争末期には、召集される兵士が急激に増え、校舎が兵舎などに使われるようになり、すでに学校は教育の場ではなくなっていました。そして敗戦を迎えることになります。

参考：社会科副読本『のびゆく杉並』　杉並区教育委員会